

理事長 土屋 勝

石灯籠には、「皇紀二千六百年（1940年） 庚辰秋十月 柳馬場六角 上尾庄兵衛 建之」と銘が刻ま
れており、本学愛学館前、上尾庄兵衛様 頌徳碑の
並びに設置しています。

歴史を感じさせる大変立派な石灯籠です。ぜひ、
皆様も一度ご覧になって下さい。

なお、上尾庄兵衛様は、大正2年（1913年）以
来、私立京都薬学校・京都薬学専門学校を通じ30余
年間経理の重責を担い専心母校の運営と発展に尽さ
れた功労者で、頌徳碑にはその功労を称えた銘文が
刻まれています。



私の薦める、私の一冊  Column

代謝分析学分野 教授 安井 裕之

小熊英二 著『社会を変えるには』
講談社現代新書 (2012)

本書のタイトルだけを見れば、社会革命家の思想
や行動が書かれている過激な内容の書籍を想像され
る人が多いかも知れません。一方で、今の社会を変
えたい、と何となく日頃から思っているけれども、
実際には自分の力で変えられるとは思えない。そも
そもどうやれば「社会を変える」ことになるのか分
からないと心に抱いている人も多いのではないで
しょうか。本書は、後者に当たる人たちに、「そも
そも社会を変えるというのは、具体的にどうい
うことか」、「現代において社会を変えるとは、具
体的にどういふことか」を少し真面目に考えたり行
動してみたりするためのヒントを与えてくれます。

注目すべきは、著者の小熊英二氏（慶応義塾大
学総合政策学部 教授）が、2011年に発生した未
曽有の東北大地震と福島原発事故の後に本書を出
版している事実です。ポスト2011年の日本は、そ
れまでの日本とは違う社会の方向へシフトしてい
く発想を広げる必要があるのでは、と思った人が
本学にも多いでしょう。その変化のスピードが、
緩やかなのか急激なのかは全く見当がつかませ
んけれども、若い世代が変化の必然性を考える
大きなきっかけになったのは間違いありません。

社会を変えてみたいのなら、近代から現代に
かけて日本の社会が変遷してきた歴史を正確に
知る事がまず必要です。小学校から高校までの
間に日本の近

代史や現代史をじっくりと学んできた経験を持つ
若い人がほとんどいないのですから尚更です。そ
して、もっと知ってほしい事は、社会を構成する
個々の単位である、自分と他者との関係性の大き
な変化です。例えば、家庭、友達、学校、職場、
地域社会、国家といった構成員の数が少ない集
団から多い集団まで、現代では集団内の人間関
係が根本から本質的に変化してきています。も
はや、「私がいて、あなたがいる」と言った最初
に個人がいてそこから始まる関係性ではなく、「
集団の中で始めから存在しているのは相互関係
のみで、そこに当てはまる主役と相手役が事後
的に決まる」世の中になってきています。この
「個体論の発想から関係論の発想」への変化
の方が、より大きなパラダイムシフトであ
って、21世紀の国内や海外の市民社会のベ
ースになっていくでしょう。そこでは、人々
がより自由になって個人の選択は増大してい
る様に見えますが、単に「選択肢が増えた」と
いうより「選択できることを意識するよ
うになった」というのが本当のところ
なのです。

こんな風に本書を紹介してみても手に取る
人が増えてくれるのかは予想できませんが、
7章構成の中で最後の第7章から読んでみ
てもいいでしょう。そこには、皆さんが
一番関心のある現代日本のことが書い
てあります。そこから前の各章に戻って
読むのもいいと思います。あるいは、
そもそもデモクラシーってなんだ、
日本にはどんな風に導入されたのか、
ということに関心のある人は、そこ
から眺めてもいいでしょう。

※本書は入荷次第、図書館内の本誌推薦書コーナーに展示いたします。